

# 日本人大学生の独立意識と親子間の親密さに関する研究

池田 和夫

(人文学部人間文化学科)

## A study on the psychological independence and the parents-child cohesion of Japanese undergraduate students

Kazuo IKEDA

Faculty of Humanities, Kochi University

Abstract: The purpose of this study was to investigate the relationship between psychological independence of and parents-child cohesion of adolescents. Japanese undergraduate students, 85 females and 99 males, answered questionnaires composed of three kinds of scales: self-reliance, dependence-on-parents, and defiance-confusion. They were also asked to express their family structures by depicting symbols of their family members in 9 x 9 grids. In the test, the dyadic distance between the symbols represented the cohesion of the members. The main results revealed by analyses of the scores and the distances were as follows. 1) Female students showed lower scores than male students in the self-reliance scale, and higher scores in the dependence-on-parents scale. 2) No difference was found in the parent-child cohesion between high- and low-score groups of the self-reliance scale. 3) The adolescents in high-score group of the dependence-on-parents scale perceived higher cohesion among their family members than those in low-score group. 4) The students in high-score group of the defiance-confusion scale tended to show lower cohesion between parents and themselves.

キーワード：青年，独立意識，親子関係，家族構造，親密さ

Key words : Adolescent, Psychological independence, Parents-child relationship, Family structure, Cohesion

### 目 的

青年期は、子供が親に依存する関係から、親から独立し親と対等な関係に至る過程であると考えられている。この過程を心理的離乳という観点から論じた落合・佐藤（1996）によれば、この時期の親子関係は大きく5段階に分類され、青年期前期においては、「親が子を抱え込む関係」や「親が子を危険から守る関係」が中心であるのに対して、青年期後期においては、「子が親から信頼・承認されている関係」や「親が子を頼りにする関係」へと移行していく、と主張されている。こうした親子関係の発達的变化は概ね妥当であると思われるが、前者の2関係と後者の2関係の間に位置すると考えられる「子が困った時に親が支援する親子関係」が、中学生と同様に大学生の母子関係にも顕著に見られることから伺えるように、依存から独立への推移は、従来考えられているほ

ど単純で不可逆的であるとも思われぬ。

青年期における親子関係の変化は、青年の自覚する独立心・依存心等とも関連が深いものと考えられる。こうした青年の心理的側面を定量的に測定する試みは、加藤・高木(1980)によって行われている。彼らの作成した独立意識尺度では、因子分析により抽出された3因子に対応する尺度項目が決定された。第1の尺度は「独立性」の尺度と命名されているが、ここにある項目は主に青年の自己に対する自信や自負に関するものであり、この尺度は、自分らしい生き方や自分の判断への自信がどの程度確立しているかを測るものであると言えよう。第2の尺度は「親への依存性」の尺度と命名されているものであり、親からの指示や情緒的援助を期待する程度を測定するものである。「反抗・内的混乱」の尺度と命名された第3の尺度は、大人(親や教師)に対する根柢のない反発や自分の劣位意識を定量化しようとするものである。中学生・高校生および大学生を対象に独立意識尺度を用いた調査を実施した研究結果(加藤・高木, 1980)によれば、反抗・内的混乱尺度は、成長に伴いその得点が低下するものの、独立性尺度得点には発達の変化は見られなかった。また、親への依存性尺度は、男子では中学・高校・大学生に差が見られないのに対して、女子の場合、高校・大学生の方が中学生よりも高いという結果が示されている。

独立意識と親子関係に関しては、日米の青年を対象とする研究が小野寺(1993)によって行われている。小野寺は様々な質問項目を設定し、アメリカおよび日本の大学生の回答を多面的に比較しているが、独立意識に関しては、全般的に日本人学生の方がアメリカ人学生よりも低く、さらに日本人の中でも、女子学生が男子学生よりも有意に低いことを見出している。また、父親や母親に対する情緒的結びつきや愛着に関しては、日本の大学生には顕著な性差が存在し、男子大学生は非常に低い値を示している。日本の女子学生はそれに比べ高い得点ではあるが、アメリカの男女学生はさらに高い得点を示す傾向にあり、この調査では、従来指摘されてきたような日本における密着した母子関係は見出されていない。

一方、シンボル配置技法を用いて家族構造の認知を調べる研究においては、日本人大学生の結果に母子密着の傾向が見られる。シンボル配置技法とは、被検査者が認知する家族構造をシンボルによって表現させるものであり、そのひとつであるFamily System Test(Gehring, 1984; 1993, 以後、FASTと略称する)では、9×9の格子が描かれた盤上に木製の人形を配置し、人形間の距離によって成員間の親密さを、人形の高さによって成員間の階層性を表現する。欧米の青少年を対象にFASTを実施した研究結果より、Gehring等は、健全な家族では両親間が親子間よりも親密で、親は子供よりも階層性が高いのに対して、問題のある家族では親子間に両親間よりも高い親密性が見られ(世代間結合)、階層性においても親子間に差がない場合(世代間平等)や子供の方が親よりも高い場合(階層性逆転)が多く見られると主張している(Gehring, 1993; Gehring & Wyler, 1986)。これに対して日本の大学生を対象としてFASTを行った研究では、理想とする家族構造としては両親間の距離が最も近く、子供は両親と一定の距離をとると表現されるが、現実の家族構造においては、父親と子供との距離が遠いのに対して母親と子供との距離が近く、両者が親密であることが示された(池田, 1996; 1997, Ikeda & Hatta, 印刷中)。これと同様な結果は、別種のシンボル配置技法であるDoll Location Test(DLT)を日本人学生に実施した研究においても見出されている(Hatta & Tsukiji, 1993; Hatta, 1994)。

上記のように従来の研究を概観すると、日本の大学生では親からの心理的独立が全ての学生において完了していると言うことはできず、青年期後期を迎えてなお、親への強い依存的傾向を残しているものが少なからず存在するものと考えられる。また、こうした親への依存的傾向における個人差は、青年が認知する家族構造、特に親子間の親密さとも関連するものと思われる。そこで本研究は、現在の日本人大学生の独立意識と家族構造認知の調査を同時に実施し、それぞれの結果の検討

に加えて、両者の関係を探ろうとするものである。独立意識に関しては、加藤・高木(1980)が作成した独立意識尺度を用い、その結果を彼らが示した結果と比較する。家族構造認知に関しては質問紙型のFASTを用いる。前述のように、本来FASTは人形等の器具を使って個別に実施する検査法であるが、個別検査ではデータの収集に多くの時間と労力を必要とする。そこで、FASTの基本的な考え方を生かしつつ、質問紙上で簡便にこれを実施する方法が試みられており、その可能性が検討されている(川口, 1999)。質問紙型のFASTには、家族メンバーの階層構造をシンボルの高さで表現することができないという欠点があるが、シンボル間の距離で表現される家族メンバー間の親密さに関しては大きな問題はないと思われるので、本研究では父親・母親・子供(学生)の3者間距離を指標として分析を行う。つまり、父母間・父子間・母子間距離の関係が、回答者である学生にどのように表現されるのか、また、その表現が、回答者の性別、両親との同居・非同居の別、あるいは独立意識の各尺度得点の高低によってどのように異なるのかを検討するのが本研究の目的である。

## 方 法

### 【対象者】

分析に用いられた調査対象者は高知大学の学生184名(女性85名, 男性99名)であり、平均年齢は女性19.1歳(SD=1.2), 男性19.5歳(SD=1.2)であった。また、対象のうち両親と同居しているものが34名、一人暮らし等、両親と別居しているものが150名であった。なお、片親の者および回答に不備のあった者は分析対象から除いた。

### 【調査時期】

本研究の調査は1999年11月に実施された。

### 【調査方法および質問項目】

調査は、質問紙を集団に配布し、回答後それを回収する形で行われた。質問紙は4つの部分からなっており、第一の部分は、回答者とその家族全員の年齢・性別・職業および同居・非同居の別を問うものであった。第二の部分は、FASTを質問紙上で実施するためのものであり、教示と9×9マスの格子状の枠(1マス1.6cm四方)が印刷されていた。この部分の回答に入る前に、調査者は教示により次のような点について説明した。①この質問は、マス内に家族メンバーを示す記号(例えば、父親:P, 母親:M, 第1子:C1, 第2子:C2)を配置することによって、家族の現在の状況を表現するものであること。②記号間の距離がお互いの親密さを表し、二つの記号が隣り合っているときにはふたりがとても親密であり、二つの記号が遠ざかれば遠ざかるほどお互いが気持ちの上で離れていることを意味すること。③家族メンバーの向いている方向を矢印によって示すこと。④家族メンバーの持つ力や影響力を、記号を円で囲むことによって表現することができ、円の数が多いほどそのメンバーの影響力が大きいことを示していること。以上の説明によって回答者が表現方法を理解した後に回答が開始された。また、表現された家族の状態が通常のものであるかという点についても回答を求めた。質問紙の第3の部分は、家族内のコミュニケーションに関して問うものであったが、この部分に関しては、本論では分析対象としない。第4の部分は、回答者の独立意識を測定するものであった。用いられた独立意識尺度(加藤・高木, 1980)は20項目からなるが、その内10項目が「独立性」に関する項目、5項目が「親への依存性」に関する項目、残る5項目が「反抗・内的混乱」に関するものであった。各項目ごとに、「全く当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法で回答を求め、それぞれの回答に対して5点から1点(逆転項目は1点から5点)の得点を与えた。

## 結 果

Table 1. 独立意識得点の全対象者および男女別の平均と標準偏差

		男性	女性	全対象者
独立性 尺度得点	平均	34.2	32.1	33.3
	標準偏差	5.4	5.7	5.6
依存性 尺度得点	平均	13.9	16.9	15.2
	標準偏差	4.1	3.9	4.2
反抗・内的混乱 尺度得点	平均	11.7	11.6	11.6
	標準偏差	3.1	3.6	3.4

Table 2. 独立意識得点の同居・別居別平均および標準偏差

		同居	別居
独立性 尺度得点	平均	31.7	33.6
	標準偏差	5.7	5.6
依存性 尺度得点	平均	15.9	15.1
	標準偏差	4.1	4.3
反抗・内的混乱 尺度得点	平均	11.6	11.6
	標準偏差	3.0	3.5

点を t 検定によって比較したところ、独立性尺度得点において差のある傾向が見られたものの ( $t=1.86$ ,  $df=182$ ,  $p<.10$ ), 依存性尺度得点および反抗・内的混乱尺度得点には有意差が見られなかった。よって、親との同居・別居という生活形態に違いがあっても、両者の独立意識にはほとんど差異のないことが判明した。

## 【両親および親子間の距離の分析】

質問紙型FASTで得られた結果のうち、回答者である学生と両親との距離に注目し分析を行った。ここで2者間の距離は、Gehring(1993)と同様に、隣りあうマス間を1とするユークリッド距離とした。

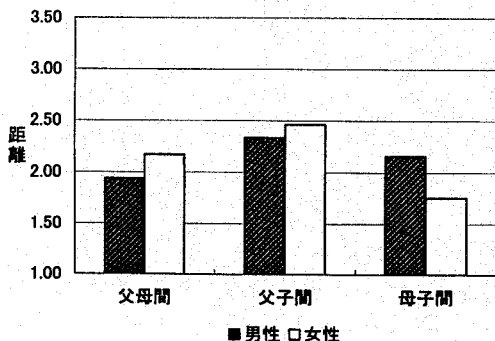


Figure 1. 父母子間距離の男女による比較

## 【独立意識得点の分析】

独立意識尺度のうち、「独立性」に関する項目の総得点(以下、独立性尺度得点と呼ぶ)、「親への依存性」に関する項目の総得点(以下、依存性尺度得点と呼ぶ)および「反抗・内的混乱」に関する項目の総得点(以下、反抗・内的混乱尺度得点と呼ぶ)を対象者ごとに算出した。Table 1は、それぞれの尺度得点に関して、対象者全員および男女別の平均と標準偏差を示したものである。男女の得点の差異を判定するために、それぞれの尺度得点毎に t 検定を行ったところ、反抗・内的混乱尺度得点には有意な差異は見られなかったが、独立性尺度得点および依存性尺度得点の性差は有意であった(独立性:  $t=2.59$ ,  $df=182$ ,  $p<.05$ , 依存性:  $t=5.08$ ,  $df=182$ ,  $p<.01$ )。従って、独立性尺度得点は男子学生の方が女子学生よりも高く、依存性尺度得点は女子学生の方が男子学生よりも高かったと言える。

続いて、親と同居している学生と別居している学生のグループ別に、それぞれの尺度得点の平均と標準偏差を求めた (Table 2 参照)。両群の各尺度得

【性別による比較】 Figure 1は、男女別に父母間・父子間・母子間の平均距離を示したものである。この結果に2(性別)×3(2者関係)の分散分析を行ったところ、性別要因の主効果は有意ではなかったが、2者関係要因の主効果が有意となった ( $F(2,364)=10.63$ ,  $p<.01$ )。下位検定の結果、父母間距離と母子間距離には有意差はないが、父子間距離が父母間および母子間距離よりも有意に長いことが明らかとなった(父母間-父子間:  $q=4.28$ ,  $p<.01$ , 父子間-母子間:  $q=6.21$ ,  $p<.01$ )。さらに、2要因の交互作用が有意であったので ( $F(2,364)$

=5.89,  $p < .01$ ), 多重比較を行ったところ, 男性の結果では父母間-父子間にのみ有意差が見られた ( $q=3.95, p < .01$ ) のに対し, 女性の結果では, 母子間よりも父母間が有意に長く, さらに父子間は父母間よりも有意に長いことが明らかとなった (母子間-父母間:  $q=4.19, p < .01$ , 父母間-父子間:  $q=2.87, p < .05$ , 母子間-父子間:  $q=7.06, p < .01$ ).

〔同居・別居による比較〕 同居・別居のグループ別に算出した平均2者間距離をFigure 2に示す。2 (同居・別居) × 3 (2者関係) の分散分析の結果, 同居・別居要因の主効果および交互作用は有意ではなく, 2者関係要因の主効果のみが有意となった ( $F(2,364)=7.06, p < .01$ )。下位検定より, 父母間と母子間には有意差はないが, 父母間-父子間 ( $q=3.14, p < .05$ ) と父子間-母子間 ( $q=5.28, p < .01$ ) に有意な差があることが判明した。この分析結果は, 両親と同居しているか否かにかかわらず, 両群が同様の父母子間距離を表現したことを示している。

〔独立意識得点による比較〕 独立意識尺度に含まれる3種の尺度得点によって, 回答者を上位得点群と下位得点群に分類し, 両群の回答者が示した親子間の距離を比較検討した。それぞれの尺度得点の上位および下位群を全体の4分の1のサンプル数で作ると各々46名ずつということになるが, 境界値において同得点のものが複数いる場合があったので, 各群のサンプル数が46に最も近くなるように境界を設定し, 高得点群と低得点群を決定した。

独立性尺度得点によるグルーピングでは, 38点から46点 (平均40.4点) の44名を高得点群とし, 19点から29点 (平均25.8点) の43名を低得点群とした。Figure 3は, グループ別に算出した平均2者間距離を図示したものである。このデータに2 (得点群) × 3 (2者関係) の分散分析を行った結果, 得点群の主効果および交互作用は有意ではなく (共に,  $F < 1$ ), 2者関係要因の主効果のみが有意となった ( $F(2,170)=4.29, p < .01$ )。下位検定より, 父母間と母子間には有意差はないが, 父母間と父子間 ( $q=3.42, p < .05$ ) および父子間と母子間 ( $q=3.73, p < .01$ ) に有意差があることが見出された。つまり, 独立性尺度得点の高低にかかわらず, 父子間の距離が他の二つの距離よりも長いことが示されたと言える。

依存性尺度得点によるグルーピングでは, 19点から25点 (平均20.7点) の40名を高得点群とし, 5点から12点 (平均9.7点) の47名を低得点群とした。グループ別平均2者間距離をFigure 4に示す。

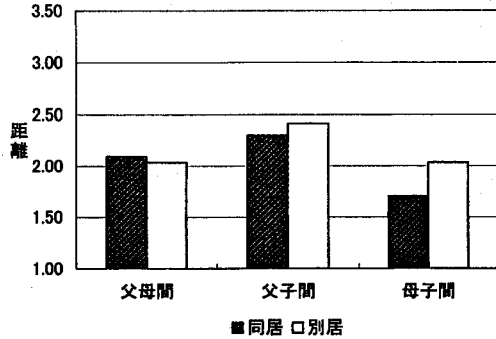


Figure 2. 父母子間距離の同居・別居による比較

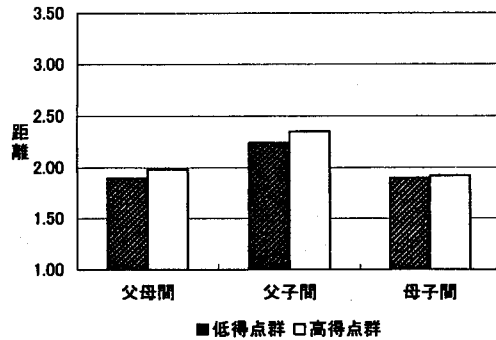


Figure 3. 父母子間距離の独立性尺度得点による比較

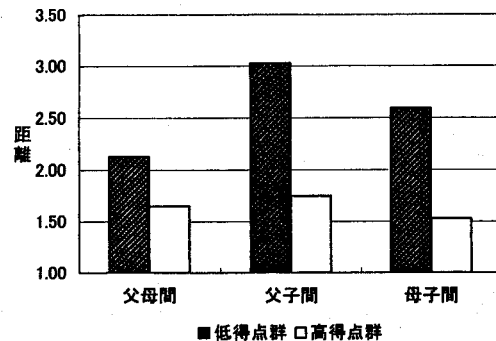


Figure 4. 父母子間距離の依存性尺度得点による比較

先と同様に2要因分散分析を行った結果、得点群要因の主効果が有意となった ( $F(1,85)=15.31$ ,  $p<.01$ )。従って、高得点群の方が低得点群よりも全般的に2者間の距離を短く表したとすることができる。また、2者関係要因の主効果も有意となったので ( $F(2,170)=6.32$ ,  $p<.01$ )、下位検定を行ったところ、父母間と母子間には有意差はないが、父母間と父子間 ( $q=4.95$ ,  $p<.01$ ) および父子間と母子間 ( $q=3.25$ ,  $p<.05$ ) に有意差があるということが示された。さらに、2要因の交互作用も有意となった ( $F(2,170)=4.21$ ,  $p<.05$ )。差異の所在を明らかにするために多重比較を行った結果、高得点群では、父母間・父子間・母子間の距離に有意差が見られないのに対して、低得点群では、いずれの距離にも有意差が存在した (父母間-父子間:  $q=6.30$ ,  $p<.01$ , 父母間-母子間:  $q=3.24$ ,  $p<.05$ , 父子間-母子間:  $q=3.06$ ,  $p<.05$ )。つまり、低得点群の回答者は父母間よりも母子間を長く、父子間をさらに長く表現したとすることができる。

反抗・内的混乱尺度得点によるグルーピングでは、14点から25点 (平均15.7点) の55名を高得点群とし、5点から9点 (平均7.7点) の48名を低得点群とした。Figure 5 に群別に算出した2者間距離の平均を図示する。上記と同様の2要因分散分析を試みたところ、得点群要因の主効果は有意とならなかったが、2者関係要因の主効果が有意となった ( $F(2,202)=6.88$ ,  $p<.01$ ) ので下位検定を行った結果、父母間と母子間には有意差はないが、父母間と父子間 ( $q=3.99$ ,  $p<.01$ ) および父子間と母子間 ( $q=4.94$ ,  $p<.01$ ) に有意差があるというこれまでと同様な差異が示された。さらに、2要因の交互作用も有意であった ( $F(2,202)=3.17$ ,  $p<.05$ )。群別に2者間距離を比較した結果、低得点群では父母間と父子間には差が見られないが、母子間がその両者よりも有意に短いこと (父母間-母子間:  $q=2.98$ ,  $p<.05$ , 父子間-母子間:  $q=4.84$ ,  $p<.01$ )、高得点群では父母間と母子間には差が見られないが、父子間がその両者よりも長いことが明らかとなった (父母間-父子間:  $q=4.84$ ,  $p<.01$ , 父子間-母子間:  $q=3.20$ ,  $p<.05$ )。また、それぞれの2者間距離を両群で比較すると、父母間距離には差がないが、父子間距離は高得点群が低得点群よりも長い傾向にあり ( $q'=2.60$ ,  $p<.10$ )、母子間距離は高得点群が低得点群よりも有意に長い ( $q'=2.98$ ,  $p<.05$ ) ということが示された。

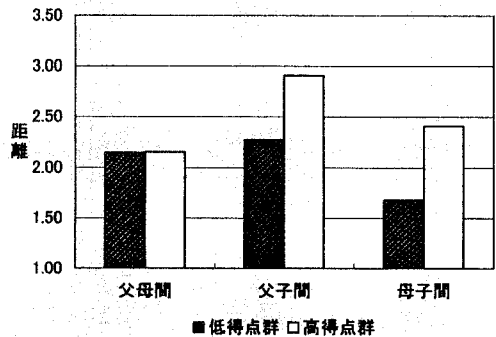


Figure 5. 父子間距離の反抗・内的混乱尺度得点による比較

## 考 察

はじめに、独立意識得点の結果について考察する。本研究の調査で得た各尺度の男女別平均得点を、1978~79年に実施された加藤・高木 (1980) の調査結果と比較すると、いずれにおいてもほぼ同様な値となっている。従って、大学生の自覚する独立意識は、約20年の時間を経ても大きくは変動していないとできよう。性差に関しては、独立性尺度得点においては男性がより高く、依存性尺度得点においては女性がより高いという結果が得られた。特に、親に対する依存性には顕著な違いが見られ、日本の女子大学生は青年期後期に達してもなお、親に対して情緒的援助を求め、諸事の決定に際して親の指示に従う傾向の強いことが示唆される。このような結果は、加藤・高木 (1980) や小野寺 (1993) の研究結果と一致するだけでなく、「子が困った時に親が支援する親子関係」が中学生と同じほど顕著に大学生の母娘関係にも見られることを示した落合・佐藤 (1996) の研究とも符合するものである。

親との同居・別居による比較では、独立性尺度得点において別居群のほうが多少高い傾向が見られたものの、総体的には両群に明確な違いは見出されなかった。親と物理的に離れ一人暮らし等をしている学生も、同居の学生と同様に親への心理的依存を維持している、あるいはそうした願望を抱いていることが示唆される。ただし、本調査では、対象者に同居学生が少なく両群のサンプル数に不均衡があったので、この点に関して断定するにはより多くの同居学生を対象とする調査が必要とされる。

ここで、独立意識得点の個人差にも注目しておきたい。独立意識の各尺度得点における散布度はTable 1に示した標準偏差からも読み取れるが、学生の回答に大きな較差のあることは上位・下位得点群の平均値の差異に明確に現れている。独立性尺度得点および依存性尺度得点の平均得点の差(各々、14.6点と11.0点)は、予想以上に大きなものであった。そして、独立性尺度において取り得る得点の範囲が5~50点であることを考えると、下位得点群の平均点(25.8点)は、非常に低い値であると言わざるを得ない。同様に、依存性尺度得点の上位群の平均点(20.7点)も、この得点範囲は5~25点であるので、非常に高い値であると言える。さらに、成長とともに低下するとされている反抗・内的混乱尺度の得点においても、その上位群の平均点(15.7点)は、加藤・高木(1980)における中学生の平均値を大幅に上回っている。以上のような結果は、大学生においても独立意識には著しい個人差があり、独立心の乏しい学生、あるいは親への依存心や大人への反発等が強い学生が数多く存在することを意味している。現代の大学生の心理的発達が一様には進んではいないという点は、青年期後期の諸相を考える際に十分に留意しておく必要があろう。

次に、大学生が表現した親子間の親密さについて考察する。まず、全般的に父子間の距離が他の距離よりも長くなっており、学生が父親とは親密な関係を認めていないことが示された。このような結果は、個別検査法のFASTによる従来の研究(池田, 1996; 1997; Ikeda & Hatta, 印刷中)でも一貫して示されているものであり、日本の家族構造に特有な特徴であると言えるだろう。さらに性差について見てみると、女子学生においては母子間の距離が父母間よりも短く、母子間に最も親密な関係が形成されていることが明らかとなった。これは、従来指摘されてきた母娘密着型の家族構造を明確に示すものであると思われる。前述の女子学生における親への強い依存性とも関連する結果であると言えよう。

親との同居・別居に関しては、親子間距離の結果においても差異が見出されなかった。親との同居は、親子間の親密さを高める可能性を持つ一方、何らかの葛藤を生じさせ親密さを低下させる可能性をも併せ持つのではないかと考えられる。また、親と別居している学生も、電話等を通じたコミュニケーションによって、親との親密な関係を維持しているものと思われる。ただし、先にも述べたように、本研究の結果は同居学生のサンプル不足によるものであるかもしれないので、同居・別居の厳密な比較は今後の研究に委ねたい。

さて、独立意識の各尺度得点において上位および下位得点群が示した親子間距離を分析した結果から、次のような点が明らかとなった。第1に、独立性尺度得点による比較では、両群によって同様な父母子間の親密さが示された。この結果は、学生の抱く自信や自負と両親との親密さとは直接関連するものではないとして解釈することができるかもしれない。しかしながら、上位群の親密さが親との対等な関係としての親近感であり、下位群の親密さが自己の未確立に起因する親への密着である、というように、両者の親密さには質的な差異があるのかもしれない。この点は今後の検討課題となる。

第2に、依存性尺度得点による分類では、両群の示す親子間の親密さに顕著な差異が見出された。つまり、親への依存的傾向の強い学生は、父母子の3者間の親密さをいずれも非常に高く認知しているのに対し、依存的傾向の弱い学生は総体的に親密さが低く、特に父子間および母子間の距離が

著しく長くなっていた。親からの情緒的援助を強く求める学生が親との親密さを強く意識していることは予想されるところではあるが、それが母親だけにではなく、父親に対しても同様であることは他の結果と大きく異なる点である。この結果は、母子関係だけでなく父子関係のありかたが、親への依存心を青年期後期にも残存させる原因となっていることを示唆するものである。つまり、子供が母親に対してだけでなく父親に対しても必要以上に親密な関係を持つこと、すなわち、両親との世代間結合が心理的離乳を妨げているのかもしれない。依存心の低い学生の結果に関しては、親からの援助や支配を脱却した学生が親との間に一定の距離を保っていることを示すものであると思われる。ただし、全被験者の平均よりもその距離が長いところを見ると、心理的離乳直後の学生が、未だ親と対等で親密な関係にまでは至っておらず、過剰な反応を示していると解釈することもできる。また逆に、親との親密な関係を維持できないでいる学生が、親への依存心を低下させたという解釈も可能であろう。

最後に、反抗・内的混乱尺度得点による比較においては、両群で父子間距離と母子間距離に差異が認められた。この尺度得点は成長とともに低下するものであるのだが、高得点群の学生は、通常青年期前期・中期に見られる両親への制御しがたい反発やひきめの感情を残している者たちである。こうした学生たちが、父親だけでなく母親とも親密な関係を取れないでいることが本研究の結果から示唆される。小野寺(1993)は、日本の大学生は男女ともにアメリカの大学生よりも両親が統制的であると感じており、またそれが、父親に対してだけでなく母親に対しても同様であることを示しているが、本研究の結果もそれに通底するものであろう。また、低得点群に見られる母子間の高い親密さも注目し値する。この群の学生が、親との対立関係を経ることなくここに至っているとすると、未熟な親子関係としての母子密着であると言えるし、親との対立関係を経た後にこのような親密さを示しているとすれば、これも日本の家族に特有な母子密着であると言う事ができるかもしれない。

以上見てきたように、本研究によって、親への依存心や親子の親密さにおいて性差が存在すること、青年の独立意識のうち親への依存的傾向や反抗・内的混乱の程度が親子の親密さの認知と様々な形で関連することなどが明らかとなった。こうした知見は、日本人大学生の親子関係や心理的離乳過程を考察する上で有効なものとなろう。また、個別対面式FASTの結果の解釈にも多くの手がかりをもたらしたものと考える。ただし、性差・依存性・母子密着の関係をより明確に同定するためには、独立意識の尺度得点による分類に性別による分類を加えた分析が必要である。また、独立意識と家族内の階層構造との関係を探る研究も行われるべきである。さらに、大学生だけでなく、より広い年齢層の青年を対象とし、青年期全般における発達の変化を検討する必要もあるだろう。

## 引用文献

- Gehring, T. M. 1984 Der Familiensystemtest (FAST); Projekt für eine Pilotstudie. Universität Zürich: Poliklinik für Kinder und Jugendliche (NAPS-3)
- Gehring, T. M. 1993 *Family System Test (FAST) Manual*. Beltz Test Gesellschaft.
- Gehring, T. M. & Wyler, I. L. 1986 Family System Test (FAST): A three-dimensional approach to investigate family relationships. *Child Psychiatry and Human Development*, 16, 235-248.
- Hatta, T. 1994 Projected family structure by modern Japanese adolescents. *Social Behavior and Personality*, 21, 7-16.
- Hatta, T. & Tsukiji, N. 1993 Characteristics of Japanese family: Evidence from the results of the Doll Location Test by university students. *Psychologia*, 36, 235-240.



- 池田和夫 1996 日本人大学生における家族構造認知の特徴—Family System Test による国際比較— 高知大学人文学部人文学科 人文科学研究, 4, 11-20.
- 池田和夫 1997 日本人を対象としたFASTの使用例—健全成人(大学生)での実施例について— 八田武志(編), 「FASTマニュアル」, 付章, 79-91.
- Ikeda, K. & Hatta, T. (in press) Perceptions of family structures by Japanese students. In T. Gehring, M. Dabry, & P. Smith (Eds.) *The Family System Test (FAST): Theory and Applications*. London: Routledge.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 川口 潤 1999 質問紙法によるFASTの実施: 具体的葛藤状況場面に関する考察 平成9~10年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書「ストレス状況下における家族の情報方略および意思決定機構に関する研究」, 54-66.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, 64, 147-152.

## 付 記

本研究の質問紙作成およびデータ入力において、高知大学人文学部平成11年度卒業生である石井彩氏の協力を得た。また、本研究と同一の調査に基づき、同氏の卒業論文「大学生における独立意識と家族構造認知との関係」が作成された。

平成12年(2000)9月30日受理

平成12年(2000)12月25日発行

